2023年8月13日　川越キリスト教会

**できれば、せめてあなた方は、すべての人と平和に暮らしなさい**

飯塚　岳夫

**【聖書】　ローマの信徒への手紙12章17節～19節**

だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。

**1.靖国神社国家護持法案**

「**日本国民は…****政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないやうにすることを決意し…この憲法を確定する**」（**1946/11/3公布　日本国憲法前文の一部**）。

1945（S20）/7/26アメリカ、中華民国、イギリスがポツダム宣言を発表。日本は8/14にその受諾を決めますが、この間に広島8/6　長崎8/9　に原爆の投下を受け1発でそれぞれ14万人、7万人の命が失われる悲劇に襲われ、ご存じのように8/15玉音放送で、国民は戦争が終わった（敗けた）ことを知らされます。日本の統治権の及ぶ範囲が限定され、軍隊の完全武装解除、基本的人権の尊重・民主主義・平和主義を原則とする新しい政府が樹立させるまで、連合軍が駐留することになります。1947/5/3施行の平和主義・軍隊を持たない憲法下の国家になるはずでしたが、1950（S25）勃発の朝鮮戦争で警察予備隊が作られ、1952には陸・海・空の自衛隊に発展してゆき、軍事力を持たない国だったのは2年ほど…このあたりからいわゆる戦前復帰が始まったのでしょうか。

キリスト者にとって避けられない問題は靖国神社の国営化の動きでした。天皇陛下とキリストとどちらが偉いか。明治以降、天皇が現人神であり、日本はこの神の国、国民は天皇の赤子、いざという時は天皇のために命を捧げよ、お国のために死んだ人を祀る、それはすべての日本人の崇敬すべき“道”道徳である、亡くなった方はみんな英霊で、個としての人間を認めない、まさにカルト教団宗教といっても間違いでない、国家神道を復活させようとしました。自民党が1969から1974まで毎年法案を提出します。靖国神社は宗教ではない、といったところで無理がありましたので、毎回少しづつ法案を修正したりして、1974は4/12衆院内閣委員会で修正議決（これは強行採決）。5/12衆院本会議で野党欠席のまま議決。参院に送られ、いよいよ成立してしまうのかなと心配と焦りがありましたが、参院では委員会に付託できず6/3会期終了で審議未了廃案。以後提出されてません。

私の父は大正2年生まれ、母は大正6年生まれ。父の弟と思いますが南方戦線で戦死しました。その知らせが届いた日、父は一晩中卓袱台で一升瓶を横に置いて一人茶椀酒をして泣いていた、と母から聞きました。「亡くなった栄さんは頭がよく、もったいないことをした。優しい人だった」と母は言っていました。山形の教会の隣には戦争でご主人をなくした方が下宿屋をしてました。4人くらいの学生下宿でしたがここに下宿するなら日曜日は教会へ行くこと、と言って結構学生を礼拝出席させていました。今だったら問題発言ですが。子どもCSの教師も何人かやってくださいました。50～60年前の田舎の教会は女性軍、専業主婦が活躍してました。靖国法案が成立しそうだ、さあ困った、偶像礼拝はできない。逐語霊感説をとる保守バプテストの教派で、山形の小さい教会で婦人会を中心にして国会議員にはがきを何枚出したでしょうか（せいぜい一人10枚くらいでしたが）。廃案になったとき，祈りが聴かれた！と、ほんとうにほっとしたのを覚えています。**政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないように**…まだ家族に、親戚に、近所の人に悲しい思いを持った人が多かった時代だったからと思います。

今年で戦後78年。戦争を知っている人、その時代を生きてきた人が少なくなってきてます。最近知って驚いたのですが、「8月ジャーナリズム」という言葉がある。8月になるとメディアがいきなり集中的に戦争に関する報道を始める。半分揶揄するようなニュアンスもある。尊い犠牲、英霊とか軽い言葉のように報道を受けとる。私たちは注意して見てゆこうと思います。

**2.シャローム（平和）**

戦争というようなことは、それがどんな理由からにせよ、回避されなければならないことです、戦争ではなく平和を求めなければならない、それはこの核兵器の時代、ますます自明なこと、人間が、世界のだれもが求めなければならないものだと思います。

「平和を願って、これを追い求めよ」（ペトロⅠ　3：11）

「敵を愛し、自分を迫害するもののために祈りなさい」（マタイ5：44）

「平和を実現する人々は、幸いである」（マタイ5：9）

　「実現する」は、「造る」（聖書協会共同訳）とも「つくり出す」（口語訳）、「もたらす」（フランシスコ会訳）とも訳されています。平和を造る人、つくりだす人、もたらす人、は幸いである。聖書は、平和というものを、与えられるもの、したがって待っていればよいものとは言っていません。幸いなのは、すなわち、神の祝福に預かるのは平和をつくりだす人々です。

新共同訳聖書で平和と訳されている言葉、口語訳聖書では、多くは平安と訳されていたといわれます。平和というと、何か客観的、社会的な感じがしますし、平安というと主観的、個人的な感じがします。聖書の平和は、その両方を含んでいるところに特徴があるとのことです。

「正義と平和は口づけし」（詩編85：11）という言葉があります。社会で正しいことが行われることが神の平和の前提であり、基礎です。そのうえで互いに受け入れあい、神の被造物すべての間に調和がある、それゆえそこに生きる人は平安でもある。それが私どもの追い求める、聖書の平和、神の平和、神による平安、シャロームです。

**3.できれば、せめてあなたがたは**

だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』（申命記32：35）と主は言われる」と書いてあります。（ローマ12：17～19）

「悪に悪を返さず」。これは山上の説教でしょうか。「右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」とか「悪人に手向かってはならない」とか。悪に悪を返せば、憎悪の連鎖が起こり悪は断ち切れない。しかしこれは私（たち）にはなかなかできない。イエス様の言葉としてしか聞き取れない。

しかしパウロは、悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように「心がけなさい」と言っている。できなくてもいいということではありませんが、心がけることは、努力することはできるかもしれない。もう一つ「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」と言っています。私（たち）は「すべての人」と平和には暮らせないかもしれない。でも「できれば」とパウロは言っています。

できれば、せめて、心がけて、3回に1回でも、イエスを信じるものとして、すべての人の前で全を行えるよう、すべての人と平和暮らせるようにしてゆきましょう。

祈ります。天のお父様、すべての人と平和に、平安のうちに過ごせますよう、あなたの教えに従ってゆけますよう、導きをお願いいたします。アーメン